

令和5年度いじめ・不登校・暴力行為等の未然防止事業(心の交流事業) 成果報告書

1 指定校 高松市立三溪小学校

2 実施の内容

(1) 教員による児童の自己有用感の育成

① 「問い(自己課題)」と「振り返り(内省に基づく改善)」を大切にした実践の積み上げ

「学習課題をもつ → 課題解決 → 振り返り」という学習展開による思考の深まりを、特別活動や生活全般において位置付け、自身の行動やその背景となる「ものの見方や考え方」を見つめ直せるようにすることで行動改善を図った。これにより、取り組みが能動的になり、自身の経験知を駆使したり、なかまとの協働性を発揮したりすることで、自己有用感の高揚が図られた。

② 有識者による教育相談研修

現職教育の時間に、外部講師を招聘して、子ども理解につながる知識・技能の習得のための研修を位置付けた。事例に基づき小グループで具体的に考え合うことで、状況からの内面の見取り方や、それに伴う対応の仕方について学ぶことができ、自己肯定感を大切にした児童への関わりに生かしている。

③ 異学年交流の活性化による社会性や自己有用感の育成

ペア活動(6・1年、5・3年、4・2年)の春の運動会への位置付けを契機に、学習等における学級間での自由交流を促した。また、全学年で構成された縦割りグループによるなかよし班活動の毎月の位置付けにより、上学年、下学年共に相手の思いを尊重する経験が相手意識の高揚につながられた。

④ 委員会活動等における自主的・創造的な取り組みの保障

児童が見出した学級や学校の課題を尊重し、そのための解決策や改善策を自身で模索させ、実際に働きかけるという取り組みを保障した。主に委員会による活動が主であったが、全校生への周知ボード(掲示板)やプリントの作成・配布、校内放送の使用等の面から取り組みを支援することで、能動性や協働性が発揮され、活動の質的向上が見られた。

(2) 児童による自発的・自治的活動の推進

① 「なかまキッズ」を中心とした「楽しい学級」づくり

- ・ 学期毎に2名ずつ増えていく「なかまキッズ」(学級のなかまづくり推進委員)のバッジを全校生からの公募により作成し、更なる自覚化・意欲化を図った。
- ・ 学級の取り組みをテレビ朝会等を通して全校生が共通理解する場を設けることで、楽しい学級づくりに向けた活動の充実化を図った。
- ・ なかまづくり月間(「強めよう絆」月間)には、人間関係構築のベースとなる相互尊重に基づいた言動に焦点を当て、全学級が共通課題として取り組むことで、意識の強化を図った。



〈全校生からの公募により決定・作成した「なかまキッズバッジ」〉



〈集会委員会の企画・運営による朝の「ときめきレクリエーション」～ポイントカードを携えて続々と集合～〉



〈ペア間の協働性が発揮された運動会～互いに励まし合い、称え合う姿が目立った～〉



〈外部講師を招聘しての教育相談スキルアップ研修～事例に基づく演習により実践力を高める～〉

② 委員会活動を中心とした「楽しい学校」づくり

「全校生に楽しんでもらえる活動を企画したい」「給食の返却時の混雑を改善することで、苛々の解消や怪我予防につなげたい」等の学校課題を各委員会目線から見出し、そのための方法について話し合いを進め、実践化に向けた計画立案から運営までを行った。担当教員は見守りに徹することで、失敗を改善する方法を自分たちで見出し、次の実践に生かそうとするなど、主体性や創造性、協働性の高まりが見られた。課題がクリアされる喜びが自信となり、更なる活動意欲につながられた。

3 成果

(1) アンケート結果の変遷

8月と12月の結果比較により、次のような成果が得られた。

質問項目	8月実施結果	12月実施結果
自分にはよいところがあると思う	85%	86%
自分のことが好きだ	74%	77%
自分のクラスは自分がやってみたいことに挑戦できる	91%	94%
自分のクラスは色々な活動に協力して取り組んでいる	91%	93%
自分のクラスは失敗しても認めてくれる	87%	89%
自分のクラスは授業中、自分の発表をよく聞いてくれる	87%	92%
自分は周りの人から感謝されたことがある	89%	93%
自分には、気持ちを分かってくれる友だちがいる	92%	96%
自分のクラスの人には、自分に嫌なことをしたり言ったりしない	75%	80%
先生は自分を褒めてくれる	89%	92%
色々な活動をする時に先生は私たちに活動を任せてくれる	91%	92%

自尊感情、受容的・共感的な学級の雰囲気、自立した取り組みの保障と、どの項目もわずかではあるが、ポイントが上昇しており、取り組みの成果が窺える。特に、「自分のクラスは授業中に自分の発表をよく聞いてくれる」「自分のクラスの人には自分に嫌なことをしたり言ったりしない」の項目は5%上回っており、特に学級内での良好な人間関係が築かれてきたという点が評価される。担任が「なかまキッズ」の取り組みを支えながら、児童自身が自主的・創造的・協働的に、取り組みを重ねながら活動の充実化を図ってきた成果の現れだと考える。

(2) 自発的・自治的な交流活動における子どもの様子

「楽しい学校づくり」にアプローチしやすい集会委員会の取り組みが最も顕著であったが、校内放送で全校生に呼び掛けたり、スタンプラリーのカードを作成し、印刷して配布したりという活動を自分たちで行えるという新たな見方ができたことが、「自分たちもやってみよう」という能動性や協働性につながっている。今後ますます、多様な委員会や各学級における相手意識をベースにした、創意溢れる活動が展開されることを期待したい。

(3) 総括

ペア学年とともに、全学年の児童で構成した縦割りグループの取り組みも導入し、朝の活動の際に数回遊んではみたものの、人数が多すぎて「みんなで遊んで楽しかった」という思いには至っていない。本年度、多様な取り組みを試みたが、改善策を協議し、実践の充実化が図られたとは言い難いものも正直ある。今回、教育目標と関連付けて、「問い」と「振り返り」を重んじつつ児童主体の取り組みをめざしてきたが、我々指導者が、常に自分自身を、そして自身が担任する学級を、学校全体を、と強い課題意識をもって捉え、臨まないとは実現は不可能である。さらにもう一年取り組みを重ねることで、教員の意識の向上とともに、本年度不十分であった取り組みの実現化に向け、努力を重ねていきたいと切に考える。教員の資質向上を図り、連携体制を整えることにも力を注ぎながら、「明日も通いたくなる楽しい学校づくり」を次年度も継続して取り組んでいきたい。